

長寿リスクにおけるDC運用の重要性と課題

高岡 和佳子 CMA

目 次

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1. はじめに（長寿リスクの定義） | 3. 資産形成段階の意思決定と長寿リスク |
| 2. 退職後の意思決定と長寿リスク | 4. おわりに |

長寿リスクには様々な定義があるが、本稿では、退職後に生じる生活水準の低下を長寿リスクと定義する。長寿リスクに関連する様々な意思決定を、長寿リスクの大きさを軽減するものと、長寿リスクの大きさではなく、長寿リスクの特性を変えるものに分離し、長寿リスク軽減における資産形成期の意思決定の重要性を再確認する。その上で、高齢期の所得確保手段の多様化が進む現在の課題と、資産形成期の適切な意思決定を促すために求められる対応策に対する私見を記す。

1. はじめに（長寿リスクの定義）

(1) 資産の枯渇か、それとも困窮か

長寿リスクには様々な定義がある。例えば、浅野・住友信託銀行年金研究センター編 [2012] では、平均寿命の長期化（長生き）により、十分な退職給付を確保できず、生存中に資金が枯渇してしまうリスクを「長生きリスク」と定義する。このように生存中の資産枯渇に焦点を当てる定義がある一方で、長生きすることによって、退職後の生活費や医療費、介護費用などの負担が増大し、退職後の生活に備えた資金が不足することで経済

的に困窮すること自体を長寿リスクと定義する場合もある（注1）。

退職後の生活を送るに当たって、これまで形成してきた資産が枯渇するまでの期間を意味する「資産寿命」という言葉が用いられるように、生存中の資産の枯渇に焦点が当たることが一般的である。しかし本稿では、退職後の生活に備えた資金の不足に起因して経済的困窮に陥ることを長寿リスクと定義する。このため、実際に資金が枯渇しなくても、余命と資産の保有状況に照らして、合理的かつ適正な水準まで生活水準を落とした結果、経済的困窮状態にあるケースも長寿リスクが



高岡 和佳子（たかおか わかこ）

ニッセイ基礎研究所 金融研究部 主任研究員。1999年大阪大学 工学部応用自然科学科卒業、2009年一橋大学 大学院国際企業戦略研究科修了。1999年4月、日本生命保険入社。資産運用部門およびニッセイアセットマネジメントを経て、2006年3月よりニッセイ基礎研究所。2017年3月より現職。